

Title	アートベース・リサーチの作品制作を巡って：皮膚感覚で行う社会学
Sub Title	Remarks on the making of art-based research work : visual sociology and short film "Skin"
Author	プルサコワ, アリナ
Publisher	三田社会学会
Publication year	2021
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.26 (2021. 7) ,p.34- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：映像を使う社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20210703-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アートベース・リサーチの作品制作を巡って
——皮膚感覚で行う社会学——

Remarks on the Making of Art-based Research Work:
Visual Sociology and Short Film “Skin”

ブルサコワ・アリナ

1. 学会報告を再構想する

なぜ演劇学会で演劇が上演されないのか。2017 年 6 月、慶應義塾大学日吉キャンパスにて日本演劇学会全国大会が開催され、アートベース・リサーチ(Arts-based Research: ABR)を実践する KeioABR のチームが学会報告の時間内に小さな演劇を上演した¹⁾。教室には千葉県市原市に旅館を営む女将のインタビューの音声とコントラバスの音が鳴り響き、少し不思議な雰囲気漂っていた。演劇をテーマとする学会で演劇を鑑賞することは当たり前のように見えても、実際のところは珍しい出来事である。そうした体験は私にとって学会とは何かと考えさせられるきっかけとなった。それは知が創造され、共有される場所であるか。それとも自分の研究を売り込み、履歴書の穴を埋めるための場所であるのか。しばらくして、博士課程に進学した私にも学会報告を行う機会が増え、それらの多くはお決まりのパターンで構成されていた。決められて時間で誰かが一方的に語り、オーディエンスは関心がないものに視線を向けずに機械的に情報を処理し、双方とも想像力を働かそうとしていない。きっちりとしたシステムやルールによって麻痺させられている研究者には抽象化された言葉とメタファー的な作品を受け入れる余裕がもはや残されていない。アカデミックな世界に対してこうした違和感を覚えるようになった私は作品を上映できる場を探し求め、今回のシンポジウムのために一本の短い映像を制作することにした。

「映像を使う社会学」という表題を掲げる今回のシンポジウムは典型的な学会の例外ではなかった。多くの発表はすでに行われた実践および制作された作品を分析することに重点を置き、映像の上映は予告編や作品の一部に留まっていた。無論、それらの全ては有意義な分析であり、問題は発表者側にあるわけではない。学会で映像作品が上映されない理由がさまざまである。一般的に報告時間は 15～20 分以内と決まられており、そこにはまず作品を紹介し、上映し、説明する時間がない。増して、30 分以上のドキュメンタリー作品もダイジェスト映像も上映する時間もない。つまり、作品を受け入れる制度が整っていないのだ。また、ドキュメンタリーではなく、アート系の作品が上映された場合、そうした作品の受け止め方がわからないオーディエンスがそこに存在することも忘れてはならない。そうした背景があり、今回のシンポジウムで私はあえて抽象的で、個人的な作品を説明せずに上映することにした。美術館で予想もしなかった作品に遭遇するかのよう、オーディエンスに先入観を与えないためである。もちろん、戸惑っていた人もいれば、質問やコメントを寄せた人もいた。特にコメンテーターを務めたお二方の言葉が興味深く、これからも作品の上映を試み、対話を続ける気持ちを後押ししてくれた。私が思うに、作品には必ずしも価値や存在意義が伴わなければならないとは限らない。オーディエンスが解釈の自由を握り、作者には何かを訴え続ける意味もない。そのため、ここでは作品の分析を行ったりせず、ごく簡単に映像制作に辿り着いた経緯とアートベース・リサーチの技法について述べて行きたい。

2. 映像社会学に探すルーツ

アートベース・リサーチに出会うずっと前、日本大学文理学部社会学科に在学していた私は都市社会学と映像社会学を専門とする後藤範章先生のゼミナールに所属していた。演習生の頃からドキュメンタリー映像の制作を学び、“「東京」ドキュメンタリー”“下高井戸・桜上水物語”プロジェクトの一環でキャンパスがある世田谷区の下高井戸駅周辺をテーマに作品制作を行い、ゼミに上がった頃には1994年から続く“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクト²⁾に本格的に関わるようになった。このプロジェクトは独自に開発し実践しているビジュアル調査法である「集合的写真観察法」を用いながら、「東京」の風景や東京に住んでいる、あるいは通勤や通学している「東京人」が写り込んだ写真を観察し、写真の背後に隠れている社会的世界を読み解きながら物語を抽出していくものである。学生が写真に写っている／写っていない現場でフィールドワークやインタビューを行い、調査結果を言葉に置き換えた上で写真にタイトルと解説文を添える。プロジェクト成果は社会学科学術系イベント「ソシオフESTA」にて写真展の形で展示され、例年は大学関係者のみならず、地域からも多くの参加者を受け入れている。

このような活動をアートベース・リサーチとして位置づけできるのだろうか。ビジュアル資料を取り扱い、チームで活動し、展示の準備や広報も行う後藤ゼミは日本大学文理学部社会学科では「変わっているゼミ」とよく言われていた。しかし、思い返せば、積極的に映像を使う後藤ゼミの活動はその根本においては新しいものを装った古典的な社会学であった。写真そのものの物語や解釈がキャプションで限定され、作品よりもキャプションと写真はオーディエンスに展示する資料であり、芸術性よりもデザイン性、映画よりもドキュメント（文章の映像化および記述のような映像）といった要素が目立ち、映像が言葉の補助的なものとして存在していた。“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクトは作品を制作するプロジェクトではなく、学術的な成果を作り出していくプロジェクトであった。もちろん、この活動はアートベース・リサーチとして名乗ったこともなく、名乗ろうとしていない。しかし、27年間も続くこの活動は映像社会学の実践として重要であり、アートベース・リサーチがまだ十分に広まっていない日本においてはその前例として位置づけることができる。

社会学は記録写真、ドキュメンタリー映画、フォト・エリシテーションなどの様々なビジュアルな資料や方法を取り入れており、そのような成果を発表できる場も増え続けている。伝統的な映像の使い方と分析で留まる研究者もいれば、さらなる挑戦を続ける研究者もいる。例えば、パフォーマティブ・ソーシャル・サイエンス(Performative Social Science : PSS)の分野で活躍しているキップ・ジョーンズは質的研究から得られたデータに基づいた映画「RUFUS STONE」³⁾をプロデュースし、アカデミックな学会のみならず、多様なオーディエンスに向けて上映を続けている。この映画はイングランド南西部とウェールズ地方におけるポジショニング、エイジング、ゲイライフをテーマにしており、Research Councils UKの助成を受けた「New Dynamics of Ageing Project」の一環として行われた調査に基づいている。ジョーンズは調査協力者のバイオグラフィーと彼自身のオートエスノグラフィーのデータから複合的なキャラクターとストーリーを作成し、ディレクターのジョシュ・アピニャネージと協力して、ストーリーを詩的に映像化したのである。

彼によれば、パフォーマティブ・ソーシャル・サイエンスはアートでもなく、サイエンスでもなく、両方を混合させたものであり、アートと人文科学の両方のツールを使いこなし、

研究を豊かにする新しいモデルである。アートベース・リサーチとも多くの共通点があるが、ジョーンズが PSS と ABR の違いは明確であると主張している。パフォーマンス・ソーシャル・サイエンスはそのすべての実践においてオーディエンスを念頭に置いており、またはリレーショナル・アートを理論的に基盤としているため、その取り組みが単なる「芸術のための芸術」ではなく、調査における創造性と、その普及や幅広いコミュニティへの関与を伴うものである (Jones, 2017)。一方で、パトリシア・リービーはアートベース・リサーチをアートの技法を組み合わせた学際的なアプローチとして位置付けており、アートをどの分野の研究課題にも、研究のどの段階でも、あるいはすべての段階でも使用できると主張している。つまり、ABR においてはデータの収集、分析、解釈、および／または普及の際にアートが用いられているのである。また、リービーは ABR を包括的な概念として捉えており、PSS をはじめとする、アートを取り入れたさまざまな方法論と取り組みはその一部であると述べている (Leavy, 2015, 2017)。しかし、社会学のみならず、教育学、心理学などと多様な分野にまたがっているアートベース・リサーチには共通した定義がなく、それぞれの領域でそれぞれの研究者が境界線を引き、彼ら／彼女らの実践を定義づけている。また、個々の分野においてハンドブックが存在し、アートの定義もリサーチの定義も実に多様である。これにはまた作品制作を学べる環境、作品を発表できる場、そして作品を批評する制度の無さが関係している。結果として、アートベース・リサーチを実践しようとしているのはアーティスト、あるいはすでにアートの知識と技法を学んでいる研究者だけである。

現在、日本においてアートベース・リサーチは主に三つの分野に分かれて展開されている：社会学 (岡原ら, 2017)、美術教育 (小松, 2018; 笠原, 2019) と心理学 (伊藤, 2018; 原, 2016) である。2015 年に設立されて以来、作品制作を続けている KeioABR のチームはこれまでにサウンドやビデオインスタレーション (土屋, 2017; 後藤, 2017)、詩や演劇 (坪井, 2017)、オートエスノグラフィー (高山, 2017) などの多様な作品を発表してきた。しかし、他にはアートベース・リサーチとして名乗っていないけれども、積極的にアートを取り入れている活動と実践が数多く存在し、2020 年に出版された『アート・ライフ・社会学: エンパワーするアートベース・リサーチ』という本はそれらを詳しく紹介している。これからも ABR の概念が広まれば、自らの実践をアートベース・リサーチの文脈で捉え直す研究者や、新たに作品制作を行う研究者も増え、そうした作品を受け入れる制度とオーディエンスも現れるであろう。

3. 映像作品『皮膚』について

前置きが長くなったが、ここでは「映像を使う社会学」シンポジウムのために制作された映像作品『皮膚』の制作過程について述べて行きたい。本作品は 2020 年の春から夏にかけて制作されたものである。新型コロナウイルス感染拡大の影響で慶應義塾大学のキャンパスが閉鎖され、フィールドワークを伴う外出の自粛が要請されていた頃に研究活動のみならず、アートを含む多くの活動が継続危機に晒されていた。外出が許されていない環境に置かれた人々は檻に入っているかのように窓から外の世界を眺め、孤独や混乱と静かに向き合っていた。しかし、それでも人々は繋がることを求め、オンライン上で展開される新たな試みも多く誕生した。

私は以前から人と繋がることについて考えを巡らせ、今回は人間の全身を纏う皮膚に着目することにした。他者と繋がり、他者を理解すること。相互理解はいかに可能か、そしてそ

れはどのように達成されるのか。長期間で聞き取り調査を行えば、研究者は調査協力者を理解することができるのか。それとも同じ空間と時間を共にしている家族でさえもいつまでも理解不可能な他人であるのか。端的に言えば、客観性という幻の基準を追い続ける研究者はその時の、その空間のエッセンスしか理解することができないのである。

人間誰しも持つものではあるが、しばし存在が忘れられているのは身体である。生身の身体がある限り、人は生き続けている。常に新しい細胞を作り出したり、成長したり、老化したりする身体は生き続け、生身の人間であるという証であり続ける。生まれた時から死ぬまで私たちは皮膚に覆われ、そこから脱出することができない。また、五感のうちで最も原始的な触感は人間の存在に不可欠であり、私たちは皮膚を通してこの世界を体験して、他の人と繋がることができる。もちろん、体内に溶け込むことができる液体の方が皮膚を通した接触よりも遥かに繋がることに近い。唾液、精液、血液などは身体に吸収され、身体と一体化する。しかしながら、例えば血を吸るような行為で繋がりを求めるとき、攻殻のように一体化から人々を守る皮膚を傷つけなければならない。このような思いを自粛期間中に巡らし、最終的に以下の詩が出来上がった：

皮膚は体重の 15% も収める、最大の器官である。

最も薄いのはまぶたの皮膚。

最も厚いのは踵ではなく、頭頂部。

最も痛みに敏感なのは指先の皮膚。

そんな皮膚の下に何がある？誰がいるの？

いつからだろう。

自分の身体が皮膚に覆われ、ここから脱出できないと気づいたのは。

皮膚の細胞を見つめ続け、「わたしは誰」と問う。

はじめて自分の身体に傷をつけたのは、14 歳の頃だった。

左手首に小さな星を削った。

ちょっとだけ。決して深くない、でも大切な傷であった。

小さな星はわたしの手首に残らなかったが、

心の傷は簡単に消えたりしない。

手首に刻まれた傷を眺め、「わたしは誰」と問う。

皮膚には完全に生まれ変わる期間がある。

それはたったの 28 日という嘘の言い伝えがある。

たったの 28 日でわたしの皮膚があなたを忘れてしまったのか。

7-8 年があれば全身の皮膚が生まれ変わるっていうんだ。

でも中身が生まれ変わる期間はあるのだろうか。

わたしがあなたを忘れる時が来るのだろうか。

ね、一生あなたを失ってしまったの。

それすら聞く勇気がなかった。

シャワーで真っ赤になった皮膚をこすり続ける。

蒸し暑い夜にやってきた、知らない君は誰だったのか。

名前なんて、顔なんて、皮膚の感覚だけが残るあの夜。
はじめて手が触れられた瞬間から嫌だった。
しつこい香水の香りも嫌だった。
知らない手の感覚がとても嫌だった。
君の皮膚はなぜこんなに熱かったのか。
とても不自然で、とても嫌だった。
でも「嫌だ」という言葉は贅沢なの。
一対一でなかなか言えない。
知らない人にはなかなか言えない。
言葉も、何も出ない。
秒数を数えて、十字架が君の皮膚にぶつかる音を聞いて。
帰り道で涙を拭き、真っ赤になった皮膚をこする。
鏡に自分を眺めて、「愛はなんだ」と問う。
真っ赤な皮膚を眺めて、「愛はなんだ」と問う。

わたしは夢を見ていた。
あなたの目を眺めている夢を。
あなたが振り向いてくれて、
わたしの目を見つめたあの瞬間の夢を何度も見てしまう。
あなたは不思議な目をしていた。
それはとても美しい目だった。
ね、あなたに見つめられている感覚が身体に刻まれているの。
全身の皮膚が生まれ変わるっていうのに、
何度も何度も生まれ変わっても、あなたの感覚がわたしの身体に残る。
もうわたしの身体に触れないと決めたのに、
わたしの背中に置いた指先。
ね、気づいてたよ。
皮膚の感覚を信じて、「愛はなんだ」と問う。

針がわたしの皮膚を刺し、見えない心の傷を身体に刻む。
言葉で言えない気持ちを、表現できない感情を、
絶えない傷を、どうにかこの皮膚で、
絵に変えて、伝えるよ。
皮膚に染み込んだインクを眺めて、「愛はなんだ」と問う。

私たちは皮膚を攻殻として纏うのか。
それとも、皮膚はこの世界と接触するためにあるのか。
全身を包み込み、誰にもわからないわたしの身体の感覚をつくる。
わたしだけの皮膚、わたしだけの記憶。
共に生まれ、共に衰える、わたしだけの身体。
皮膚の細胞を見つめ続け、「わたしは誰」と問う。

もう忘れることはないだろう。
なんだか、最初からわかっていたんだ。
もう愛がなんだと問わない。
それが愛だと、皮膚感覚でわかっていたんだ。



この作品はメタファーを用いて他者と接触する、あるいは繋がりを失うことを表現することを試みた。本編には私自身の身体が写っており、作品の背景にあるストーリーを知っている人ももちろんオーディエンスにいた。しかしながら、上映後のコメントで指摘されたように、どこまでがフィクションであり、誰の物語であるかとわからなければ、作品の受け止め方も変わり、解釈が無限に広がるのである。それはアートベース・リサーチを行う面白さでもあり、強みでもある。

4. Doing ソシオロジーから Living ソシオロジーへ

後藤ゼミナールのスローガンの一つは「Doing ソシオロジー」であった。当時は現場に足を運び、身体共に調査に立ち向かうことこそが「社会学をやる」ことを意味していると思い込んでいる自分がいた。しかし、そこには研究者の身体が欠けていた。データ分析が居心地いい安心感を私に与え、感覚を麻痺させていただけなのである。学問を始める者は誰しも客観性を信じ、実証主義の夢を見ているかもしれない。仮説を立て、実証する喜び。実証できなかったら、データの問題を見出し、実証に結果を導く。多数派、大きなものの一部、群の一員のような感覚を人々が常に求めているかもしれない。しかし、こうした過剰なデータの単純化と一般化は研究者から想像力を奪っていくのである。アートベース・リサーチに出会ってから私は研究者がいかにリサーチに対しても、協力してくれるに対しても、自分に対して

も真摯であり続けるのかについて考えるようになった。私自身は決してアーティストとして作品制作を行いたいわけもなく、社会学者の名まで捨てて小説家になりたいわけでもない。しかし、一定の距離を保つ客観性の時代は終焉を迎えていると強く信じ、これからの質的研究はパーソナルで、エモーショナル方法へ進んで行くべきだと考える。それはつまり、「Doing ソシオロジー」の時代から、研究者の身体と感情を軸としている「Living ソシオロジー」への転換である。

【註】

- 1) 日本演劇学会全国大会で上演された、坪井聡志と河崎純によるパフォーマンス「牛久きおくうた」の記録は Vimeo で視聴可能：
<https://vimeo.com/222995314>
- 2) 日本大学文理学部社会科学科後藤ゼミナールの“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクトの過去作品やドキュメンタリー映像をホームページで閲覧可能：
<https://n510.com>
- 3) キップ・ジョーンズの短編映画「RUFUS STONE」は Vimeo で視聴可能：
<https://vimeo.com/109360805>

【文献】

- 伊東留美「アートベース・リサーチの展開と可能性についての一考察」『南山短期大学紀要』(39), 2018, pp. 203-213.
- 岡原正幸編著、小倉康嗣・澤田唯人・宮下阿子『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会, 2014.
- 岡原正幸「アートベース・リサーチ なぞる・癒す・パフォーマンス」『法学研究』90 (1), 2017, pp. 119-147.
- 岡原正幸「アートベース社会学へ」『哲学』138, 2017, pp. 1-8.
- 岡原正幸、高山真、澤田唯人、土屋大輔「アートベース・リサーチ:社会学としての位置づけ」『三田社会学』21 号, 2017, pp. 65-79.
- 岡原正幸「アートベース・リサーチ：上演と身体(演劇・パフォーマンスによるアートベース社会学)」『哲学』138, 2017, pp. 217-249.
- 岡原正幸編著『アート・ライフ・社会学:エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房, 2020.
- 笠原広一「Arts-Based Research による美術教育研究の可能性についてーその成立の背景と歴史及び国内外的研究動向の概況からー」『美術教育学』40, 2019, pp. 113-128.
- 小松佳代子『美術教育の可能性: 作品制作と芸術的省察』2018, 勁草書房.
- 後藤 一樹「〈祈り〉の映像社会学：広島平和記念公園における原爆死没者追悼のポリフォニーとドラマトゥルギー」『哲学』138, (2017), pp. 61-122.
- 高山真「ライフストーリーとオートエスノグラフィー」『哲学』138, (2017), pp. 41-59.
- 土屋大輔「ABR 作品のつくりかた：レプリカ交響曲《広島平和記念公園 8 月 6 日》(2015)」『哲学』138, (2017), pp. 123-150
- 後藤一樹、坪井聡志、高山真、ブルサコワありな、岡原正幸「10 の小品・牛久：きおくうた(いちはらアート×ミックス 2017 作品提案書)」『哲学』138, (2017), pp. 175-191.
- 澤田唯人「他者の生を《なぞる》ための、今この《なぞらえ》の世界：アートベースで生きられる他者理解と社会学」『哲学』138, (2017), pp. 9-40.
- 原紘子「アートベース・リサーチの実践:調和と不調和が交差する新たな表現に向けて」育英短期大学研究紀要 33 号, 育英短期大学, 2016, pp. 1-11.

- Jones, Kip. 2014, “A Conversation Between Kip Jones and Patricia Leavy: Arts-Based Research, Performative Social Science and Working on the Margins” , Qualitative Report 19(38), pp. 1-7.
- Jones, Kip. 2017, “Performative Social Science” , Draft entry for International Encyclopedia of Communication Research Methods.
- Jones, Kip & Hearing, Trevor. 2017, “Film as Research/Research as Film” in “Handbook of Arts-Based Research” , Guilford Publications.
- Leavy, Patricia. 2015, “Method Meets Arts Second edition: Arts-Based Research Practice.” , The Guilford Press.
- Leavy, Patricia. 2017, “Handbook of Arts-Based Research” , Guilford Publications.

(プルサコワ・アリナ 慶應義塾大学大学院後期博士課程)